HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	科学を問い続ける ： 分断が進む時代における科学技術コミュニケーションの可能性
Author(s)	大津, 珠子
Citation	科学技術コミュニケーション, 37, 69-71
Issue Date	2025-08
DOI	https://doi.org/10.14943/114630
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/95908
Type	departmental bulletin paper
File Information	JJSC_37_07_ohtsu.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

小特集ノート：寄稿

科学を問い続ける
～分断が進む時代における科学技術コミュニケーションの可能性～

大津 珠子[1]

To Believe in Science, Keep Asking Questions:
The Potential of Science and Technology Communication in an Era of Fragmentation

OHTSU Shuko[1]

キーワード：科学技術コミュニケーション，CoSTEP，対話，未来のステークホルダー

Keywords: science communication, CoSTEP, dialogue, future stakeholders

1. CoSTEP 創設の原点から

CoSTEP が誕生した 2005 年は「科学技術コミュニケーション元年」と呼ばれた年だった．当時の目的のひとつは，子どもたちの理科離れを食い止めることにあった．また，科学者が国民，つまり納税者に対して説明責任を果たすべきだという考え方が広がり始めていた．知識を一方的に伝えるのではなく，サイエンス・カフェなどの場を通じて双方向的な対話の機会を創出しようという動きも盛んになっていた．科学は社会ともっとつながるべきだ，市民とともに語り，未来を描くための橋をかけよう．そうした熱気の中で，私は創設メンバーの一人として CoSTEP の立ち上げに関わった．

2. 世界が揺れる現在地

それから 20 年が経った．かつて私たちが「対話」や「共感」を掲げたとき，社会はまだ信じるに足る“共通の前提”を持っていたように思う．しかし今，世界はかつてなく揺れている．国境の垣根は高くなり，自国の利益を重視する動きが目立つ．パンデミックは科学への信頼と不信を同時にあぶり出し，生成 AI の進化は，私たちの判断や想像力を根底から問う存在になりつつある．環境問題や生殖補助医療，半導体をめぐる国際競争も，冷戦後の一定期間「中立」と見なされていた科学の営みが，対立の火種となる現実を突きつけている．

3. 未来との対話

さらに，私たちは人口構造の劇的な変化という，もう一つの大きな現実にも直面している．2024 年，日本国内での日本人の出生数は 70 万人を割り込み 68 万人台となった．2022 年に 80 万人を下

2025年 6 月19日受納　2025年 6 月20日受理
所　属：1. 北海道大学大学院理学研究院

回ったばかりなのに，信じがたいペースで減少が進んでいる．そして，744 の自治体（全国の約 4 割）が「消滅可能性自治体」とされている．20 年後，日本の風景は一変しているだろう．

これからは「目の前の相手と対話する」「相手の立場に立って考える」といったコミュニケーションの基本を超え，今まだ訪れていない未来との対話を想像する力が求められる．科学技術コミュニケーションにおいても，時間や空間を超えた“未来のステークホルダー”の存在を意識した関わり方が必要になる．

4. 世界規模の課題と科学の責務

日本が直面する急激な人口減少は，世界規模で見ると別の側面を帯びてくる．世界的に見れば，依然として人口は増加傾向にある一方で，日本を含む先進国では急速な人口減少が進んでいる．この人口動態のギャップは，地球規模での食料問題，資源の偏在，環境負荷の集中など，格差と不安定さを生み出している．これらの課題に，科学は真正面から向き合わなければならない．そして科学が生み出す技術や知識は，例えば食料増産や資源開発といった形で，グローバルな課題に対する解決策を提示する責任を担っている．しかし，まさにその時，私たちの社会は複雑さを増す一方なのである．科学と社会の関係性は，もはや「専門家が正しく伝え，市民が正しく理解する」という単純な構図では語れない．むしろ，科学がもたらす選択肢の多さや，判断の難しさにこそ，向き合うべきではないだろうか．

私はときどき，シーナ・アイエンガー（Sheena Iyengar）が 2010 年に発表した『選択の科学（The Art of Choosing）』を読み返している．そこでは，選択肢が増えることが本当に人間を幸福にするのかという問いが，豊富な実証とともに提示されている．科学は，たしかに多くの「選択肢」を私たちにもたらしてきた．だがその選択肢が，かえって判断を困難にし，個人の価値観や社会的合意を揺るがす事例も少なくない．とりわけ私が関心を持ち続けている生殖補助医療の分野では「できること」と「してよいこと」の間に横たわる深い倫理的ギャップが浮き彫りになっている．

科学によって開かれた「選択の場」において，どのような判断が社会にとって望ましいのかを共に考え，対話を通じて合意形成を試みる……そのような場づくりを支える知の営みの重要性が増している．

5. 科学を問い，希望をつなぐ営み

図 1　CoSTEP 時代の筆者

こうした複雑で不確かな社会のなかで，科学とは何か，科学とどう向き合うべきか，と改めて問わねばならない．科学によって生まれた“負の遺産”に直面しても，科学に失望してはいけない．科学の営みが功罪をあわせもち，人類の反省と知的遺産である以上，それに向けられる視線を途切れさせてはならない．

科学は，国境も宗教も人種も超えて共有できる「共通言語」であったはずである．これからもそうであってほしい．科学技術コミュニケーションは，単なる知識の伝達ではなく，価値の衝突や倫理の葛藤を見据えながら，どこまで科学を「共通の土台」として位置づけるかという試みだ．それは時に絶望を

覚えるような営みでもある．同時に，科学を信じたいという希望の連なりが，次の対話の場をつくる．その場が開かれ続ける限り，科学と社会の関係もまた，更新されていく．

6. 次世代へのバトンとして

科学技術コミュニケーションに，いまこそ期待が寄せられているのではないか．それは決して「対話のツール」としての役割ではなく，人類が自らを問い直すための“鏡”としての役割だ．20 年前，私は「科学をひらく」ことの意義を夢中で考えた．そして，20 年経った今「科学を問い続ける」ことの困難さと尊さを次の世代に託したい．

最後に，科学者であり農業の実践者でもあった宮澤賢治の言葉を胸に刻みたい．「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」．この言葉は，科学の理想と科学技術コミュニケーションが目指すべき社会のあり方を示していると思う．科学の営みは，個人の利益を超えて，全体の幸福に寄与するものであってほしい．未来に向けて，問いを語る場を耕していくことこそが，科学を人間の営みとして生かし続ける道である．